柳髮新話 浮世床 三編

號	三	第
一組	自 至	全部
巳	巳 一	十
冊	卷	冊

14
3157
42(3)

14-3157-42(3)

定則

一見料の義ハ小説物及人情本(合巻)共凡て一冊に付壹錢貳厘充
一日數の儀ハ一週間を以て一期とす
若看官の御都合ゟより右期日を超過する時ハ其期を應して見料を受
一御覧中若紛失破裂等の事有之時ハ至當ゟ御償金を申受く可し
一樂書並にまたがし等一切御斷申上候

月日　純粋堂拜白

看官諸賢御中

柳髪新話浮世床初編巻之中

東京戯作者　式亭三馬戯編

聖吉「コレ〳〵ゆびの玉章をえんせてくれおどろもつゝぶ稲くるゆが
あるト　嬶中より妻を呼ぶ　要文のところを知〳〵そんそほ　寄をまゞずよ〳〵と。ソレ受よ。
をこのふハくやくくのあが松の川ゑゝぶサ。これハつゝ淡本の
文句ゆゆるうら天概ゑゝくゆる「金五あざの「そつゝやア
ゆ公心ゝ「聖「ゑの字さ「ヤおそれるぜよく生ゝこのう「そゝハ
不便ぶゝ。露の情をかけて作ゝ「ハコデ

實とは学問の速成なり。

あとやくちよとも云きまりしまつッサ。實ごとの。五あしんべ云て

よとこるぐふ早速ちいやとえどうういふ事ごとう。いやなくう

云てよこさ極くがつ。それとも又おれが位いやとも云ごふの速

きつといふるのう「位」コロ〳〵足下でも極ぜ。それごうちとれ

文字の方へも這入くえうといふるのよ「位」事ごぎ。

此何がつうる「位」ゆさ。少しの本のはしもとつうと云

るのき。其中ふきといやとふるのう。和文ふれのるのう。勿論

礼義の禮を和訓でいやと訓せる。そのうを續本ごとふも

誤つて礼ていふるのとちつて。お礼ゆ

ごとはきつとめるうふ。ゆうぞり社るのとちつて誤伝くるのよ。

ふ速は礼といふ心いきごとうが。すぐ生さうにその婦人ふ

罪を極くふの手本とふとふごとうん「八ア」それでふうと

「全体ふの手本とふくゆうのがあるうの「位」あるとも〳〵

狂言や俳諧を四文ごうもとる人や。源本板をごゆうと人

ごとが手本とふて「それでとうう〳〵。ごとうる

お定りのめでたくもとしも寄う古んといふまぎさうで。什中の為めやまひとトやふかしくとう。此為めに又それも省略ろ。

ちて。ほんもうーさ。足こ逆くいづれちうきゐ四ぐんのふーと稲ぎ

皆ぐろふるむトやふしさ八テチ。稲ぎまぐろふるむトいつてた。

稲ぎろを拝むやうぐろ「苦」ろうほもくぐ「口」ろふ稲くの

「逆」コレサく足下ちちふ漢同士ふ書同生ぐぜ。それぐろら

俗物ごとらるよ。めまう情稲くく。寄うちちと譚をちつて云

稲くだやァのやまる「それぐん」て。位亜でも通ぐ稲ゐまぐ

社つぎ。足だやァ四ひとう美郷で先く通ぐ稲くく位ろう

白紙をとことが方がとろるふ婚ぐせ「稲」それ漢毎ぐ悪い

稲ぎまろにまんトいつるぐ「ど」れど。るの字を太きく書て。

つの字は漢け毎うが悪いくぷまぐろト漢る。一体稲ぎ

まろとらるふ四ぐんのふーをお稲ぐひまうしてカくといふ

ろぐさ「ぷ」ぷ。それが稲ぎまろる「せん」まろぐどとものこーぐゐ

「逆」まろとまるトいつるぐで男文字ろくぐ毎ぐ漢ゐといふ

四さ「せい」ぐんろふひぐ四くまぐどとりぐこの「せん」毎ぐろうまち入

りーとう。ぼまちゃー上りーとうきぢめぢーこーにしとやら
かーこ方が俗よ蔵るの「さうさく」。ものくぢ面白ぢぶが
仏を志ゝ居るりのう。漢孫人ようきくーくーにうぢめくと
ちゃうーう。それが不便ぢ「ちうどうう桑の手本ときくーくーが
古学いりふ会社とるうーくさ「古学とふまんぢ「万葉
家の志紙をとるうーくよ「万葉家とふまつきの唐人
ぢの「コ」どうもまーくぢ孫人ぢ。万葉家とふいまーくぶりと
ぢーくーぢ「昔の家代風ぢふ楓江ぢ露皮

の風ぢの「今の千歳ぢ芳村とふらうひ紙が遠ぢーくーの「こ上
どうもその紙ふりを解さ孫人ぢやア。唐人とまーくぢ孫人ぢ
「そのくーぢとふちゃぢやーくーくーぶの紀の國ぢ。ちーくーぶのまーくぢ
とふ色男ぢ「どうぢ日本ぢら亀男とふいられ孫人ぢりやは現
ぢう。ぢぢーくーぶのとんぢんやまーくぢ。ちらんぢの安藤ぢーくーぢいまーくーの
孫ぢ西の俳松の木ぢ二本の孫さ西ぢが三人まぢ。此ぢーくる世さまー箱
の中ゆ志ゝけーくあーくー「立てる唐人窓ーくーのいまーくちる俳。楓の
木ぶり。松の木のふとしーくーナシトどうぢ。まーくーくーくーくれ

目鏡人紅毛の十里見「コヤ」「どうこう」「とうこう」あるく
さらのちるめ人おめ人へむしの万年家と毎ふい知居るごらうぶ
仕声色ちたれめ人「仙」ぞんなるゆたちふどとのことぶ
「おれ」頭ふ知居るチ。それ通町へちく居ていろくる目流
をうせさ人ぶ「ムゆくちろ居る。おめ人ちまぶ物ちうぶ。なんぞ
万年家を知居ても時代遠どのゆたつふ行くぶて「とれ」
困ロ。ちるゆでらぶらるの「家」十四五年も流ちる
えうけうぶ故人ゆでもうちさ近ぶちえ行くの「ちうさ

其十五年も流のうゆを時代遠ぶちく行くせぶ万年家
とゆぶの文むしのうゆ代ゆせ知居るごらう。どうも博物ちいスキ
行人せ仏も角も知居るうら博物ちうもよれど「仏」ちく
万年家も仏も入ちるゆでやア行人「さういられて論色ぶ
ちうし足下もおれが異えるをいぶちう物ちるゆびちるの其
「うきよ物ち行ろ」「ナニサ」「学問をよ」「ナニ。論語漬の論語ちふ
よりう。論語よちすぶの論語ちふどの方がよんぷと徒よ「字」
ちうぶども金ち人祐てぶいる「字」ちるぶうり学問ぶ

通人とはどう了簡違ひ「それでもまづ字を知りよ学問を
してやんとりの手習する人のかい「さうさく字をあらはすより
三弦を習ふ踊の地をひく方がいゝ。むづかしい字をある通人が
いふと出ふよまんが読書の書の字を通人やさしくおけが
書といふ字ぶが。むづかしく書くと音といふ字ざ。あてこね
音切雀の蔦葛といふ物で。手がるい方が徳ざ。ソレよりしがれ。
ソレ。七百よト 火をじて灰の中へおくるる ソリや。むづかしく書くと音ツとくさ、
是ほどとしても百損がいく「コ」サ。どうも足下ともの度し

がない。もうくなんとりの人通人といふ出来次第「それでもおの
機園とあふ通人の世よ太むじの万葉家「とまさく。捨て
無通人物あんまりものあんまり。物あり物あとどせ「ムて
いくト 豁要人物「これはお待までござんせう「ばかぎと
早飯ぶのごとく妻とくト ゆびさきと皆 おそのことをる「ハアめずらかにらかん
より「美女ぶの「万葉家ぢやア通人「優婆家で「むかしい
「ハア紫縮緬の帯が八國織「よく夜具を着てるのう。おいらア
教えはうえるから外までの目が及ぶ通人「そとのちつと違ふ

きもりの上がざらと世西御がぞくふ婆で簪が今風二本うしろ
ざーが少し流行よもくれくるとど甲がけつろう「目がふくりのまで
はんきくに付て鼻筋見の瓜汁まで通り「口と耳の服まで
割て歯い丸杭歯「祝の因果が子ふ報ふ」「おきやアがと
仏を云ろんーゆる「志ひ」美女ざ「男好のとる風さ「亭主
ちらぐらうの「アノ嬢さまよう流の方ふまとくーでいくふ
あれい實の娘ぶぜ「きろいく遠あるく「嫁ごと見非
流へやうと姑婆が先へ去くー歩行くゆるさ「あれくー又まさ

ムアお座敷ぶの「紅裏の惣模様きまちゆんとして又姑の
「どうぐ今のこ是とんどんちふをんこゆる「そりやアこんこの
利くゆんい先の婦人さ。女房よ持るゆふ此方がとと色ゆうぐ家
家の天ふるるいる「先のぢやぷで焼くだらうの「焼く
代りゆんまぐあるぐらう「まんでも女房い所暮る不器ぐ
いぐぜ。形云くぷもれがさぐとおくふ負惜をいふぢやア稼ぐ。
焼りらとゆくをぐもちぶぷどんな穴をほらても実ゆるの。
甚ろ好で美ゆうとかせでス「まず内が静でいく「らねぐ

女房へ不器量でもいくかぶぐらうぎと所暮でをとこ〳〵で。真っを大切ゆーて。きのう者で肉を絞るのがよし。友達の女房へ小言まで姉姉ぐ。ま者めぐろう鯨舎めぐりで。酒でも飲ぐり三弦でも弾くろ。ヲヤもまとん仏でありまとふうときいざよう。きんの洒落さ。ゆどといふ浮虚者ぐ〳〵「そりやア誰でもさ」「めんまりむーぐ好るるせ」「考しあれがあうるぞ。ぐ〳〵まい女房を持居る者も損ぐよ」「それあへ又そまぐけのあめてぐひぐめるる」「さううとろくべ正公ぐ抵ゆ美〳〵女房を持るぐらはきうと考へ女と摘むあつものり」「あれいさうこうひなくさんな。居仕鯛だうり食て浮るとろ云て。さんまの干物も一口いくあんぐるる」「さうぐろれど。おようそ傍で見て居てきの毒ゆのん瀧云ぐゼ干居へ鞍習〳〵と治ぐたろう雑といふ女房ぐぶゆゼあのの女ふのろくなんさらうそのろを瀧云う好男ぐ「あの女ふゆ考ぐろる一体瀧云ぐまぐい〳〵よ」「仏射ゆ」てえくも。火鉢の点りへ二くるくんでめるうて居居ぶ。瀧云ぐ肩の一歩女房ぐゆてうと倚添ぐ。よいふ身でひうはいて居るぐ何ぐ

えるの目ぐきのどくだ。流るゝ水の如く清く
苦もなし。いふざるおせ話ぶがめれい止させて「火鉢と離る
と巨燵へ一緒よめるよ」「巨燵をそるれそ〳〵雪隠へ一緒ふ
往ごらう」「偕老同穴の契り浅うふぶとといふが。チトめまり
めるの」「欲庵が紙のとえらさよ。巨燵う〳〵で相引の金を
うくとえるの羽の羅ふるッ」「紙鳶の精霊ぷそいく
「ねきぐるふると。女房ハ家暗の精霊ぐらう」「獨吟
のげんぢよ節で正作とお助踊でえとく」「ちし家暗とも

いくらく蘿蔔芋の精霊さ」「とんぐ狂言ご」「ちとと濁へ
往くもも友達と一緒ふ出さ移くめくるふ焼くうふ大福餅
でも喜ぶとせれがいく」「流行の八里半ぐらいのさ」「おのくのの
婦人の得意ぶるものぐ内へぐう買ふるぐらう。いづれせれ
内漏るるるぶ」「七去ハもうぐ腎虚の内とも漏れ
「ゆうまいトいふ人みぐうりの作」「どうぐもや鬱さん」「ヤお出
うきい作三清さんきのふ何正人お出るまうと」「ぱきりふ
少図へ」「お往時ふう」「るんぐらうぐそりや主図平をう

ぢやらのゝ。ゝ〜ぢやて〜少國へ。ゆいどうらの。めろういうんとる
「どうちぐいのやう言ふうまれ作「ぢや迚めんまりぢやぢやな。
きのふふうらう者ふうろさにようて。河豚汁茶碗二盃ぢうと
いふ二盃ぢやが酒ぐいうんさういな。飯ふと食とうふてごうイヤく。
亟ぢの掛取ふ行る方ぐ。ゆふと婚ぢやとア。るきくて。下谷
まで行ふうい。ぢぐゆメんせ。國果のうるさごくどうめがおとし
ちふねうい。チョッいまくいへと蛸め。山程ふ用いりものも
爾ぢや。娼妓ふと買ふてぷ。ひとしぶりのめどづれいふく。

どんと踏ゆでこゑもとろふぐぐイヤく。爰ぢやと。今うろう往く
どうらふ娼妓買ふそも。ゝ悲しぐきを分ハかくるうい「きを分。工。
それで上るほうう工「ゝア。あぐくんふもせいゝア。きくんせ。其きを分を
私が母者ふ逢せくぷゝ。どうのふ恨ぐゝやらうぢいイヤく
爰ぢやとナ。まを丹田に練く。今きを分を胃の腑みとうと
歳ぢ付てナるうふ。門跡きんの傍とるんぢや往ろうまろうしく
ろうくうと了。爲仕智と爪ぢ。ろうふ。法堂前のあまぢけ
三重天ぐ息ふ。しふ走りて庵うと「まく「ヤモろうふ

熟まんて角内がそろそろいい「きんの上方猪ごてんきり
そんなるゆとろろとのさ「まんぢゆの上方股とんぼのこちゆ。
上方の後ぢや迚仕入物でもさあや。江戸子のそらぢや迚
洮向ぢやのるまいぐる「白めつくへ向正法清合況令かけ亜
なー五分でもいうねといるの。本さそられの江戸ッ子ぜそらき。
「どこが況浪掛亜ーぢや亜ふ膳玉のちいきんらせわ
ねで後がめらうぢい。悪態ぢろりぢいくーぢゆたくきんて
肚根がまいいの感ゆの肚根がうんまのるちゆ。

肚根と出ーてえ安んせ「肚根が江戸にかるつるものうナ。
まぐ物るゆが素ゆまいいる上方の達川のぎんはとそろぐいる
「庄三傷どん一す橋語ようで出てのくふとそいトいるとの▲斤り
方の對るゆが同じく言ぐ出いぐ「るんぢやまーぐるゆてごんと
「ヲいいるゆもとるんのるゆてだんと「ヲそりやてア安いるちや
ぐ已ぐろうかろとふんて内へ往で菜漬一ぜん食てるる
間先へ往て待て居い「ヲそりやまぢやもれもそのろふ
飯食て寝るやどゆかるふぐと迚るなよ「へるんで迚うぐい

おのれ甚だ忘れるよ「へうまんで忘れうぞい「えらい「えらい
「早う往ね「此茶漬飯い我うら食ふうもれうら食ふう「うたの
ようの「まいと遅いぞ「たづひの仕根「庄三郎「ちやうう「煙ふ
めうう▲トこうく夫方へ別とてちれうら子分子方と夫方う
引連く格結く二人りうふぬと大勢の子ふめうふい角力れ立
合とうる事ふなんでョョちうふいくるどとうん彩ーとなるのさ。
ちを智恵の浅く奴等ぢやァ浅くう。江戸では合点をるりんうさう
をると二人りがのそうくとそどめるうい「庄三郎ちよと下ふ

居て貰うい「ヲ下ふ居うぞ仮ぐでめるよ「うりや飯の食ふで
ぢうるうふなるいうよ「あれ使ふうよう我ぢうるうなるいうい「イヤ
おりやぢうるうなるいうい「そんなあれもぢうるうなんうい
「そんなら云ういうい又晦の月の毎日の晩ん砂場で貸ふ茶屋
の代銭二十六文ちうも甚内湯が一文交ふうさうい。あれも
男ぢやそりやうるうい。人ふ〳〵秘ふて三十五文の秘今ふで
交ふうう「ヲ〳〵アやこアちぶとふるぬうとうアそれちふ
砂場の出入がめれぢうもも出入がめるうい。格結のそうい茶

十何盃と呑〳〵と代銭おれも家で呑うゐ「〴〵さう云や呑え
のくろさい茶「我とあれとゞ出入と出入の「呑〳〵勘定「どうして
呑らうとおりゝぞい「ヲヽ呑〳〵てゐる▲トむるぐ〳〵を振〳〵ほと
「ほを形〳〵て▲ト又とんちらまで出〳〵て崩こと糊ようこと
とるやうゐまはきを〳〵て異〳〵そう〳〵万事といふ身ぐ
立上るりんざうら抓合ふまでゐ叫ゞ出る。それぐ〳〵手に組い
見物ハ終まで呑とるゆゞ称く。まう〳〵比てハ江戸子は早さ。
うんでも目紛らしの仕ぐ。此碑めといふゞ速いゐ拵り拳ぐ

徳天をポント〳〵〳〵とぐなんざ武奴ひとふ隙よ向脛をポキリ
と鄭折のき。出刃庖丁ハ任侠の魂ぐ「コレ〳〵それがめちうらや
ひいの出刃庖丁でくをめやわれば人ゐも親義させ面〳〵も
迷惑をるでめるまいゐ。先生一ゐハ主おるふ主人〳〵不忠
親ゞめ〳〵ぶ祝ひ〳〵ちく不孝の天辺ぢや。馬鹿者とも不埒
りのとも諭ゆうのゐい不美ぢやぞエ「それぐも立入と
なんてゐ〳〵ササいりんをるをこらやぐそこゐや立入ぢやゐうい
トット〳〵撲入ぢや。ゐんまゐ男を立るとゐふ者ハ立流よ比ゐて

洞海の利法中てはなさとる。ハテそれでは公なりいるとぶ
云ても給ずるいさういトウト放ち くがうらいらの。そりや馬鹿
者ぢやとゆうてハテ負てゞ紙ハ。堪忍五ゑ負てこゑの猪利
ぢや。對ふるうんぢは痛いあもせど人のは場あもかうらど
面くの身もこゝのふ納れ。それでこそ男達といわれやすれ。
今のやうるゆーてを短氣者の大ばくどう。軍書でいう
強武者ぢや。ばかりて世の中へ化物の姉ゑいぶ馬鹿りのぶ
おいらいといふ。そこぢやて江戸の狂ちぶ男の子はるふ金花

巖ちう育てゝ役ちうぬ。自慢ぢやうのぶ上方あを
甚ぶ強る馬鹿者の生まぬぢや。大坂の人者ぶ悪いとゆうくも
そんなぢやるい。京都へ別く王城の地ぢやさういう男も女子れ
ちうで方事ぶ出さうふ優ぢやらいの「京の着倒ぶなあを
ちうてぶれぶ去く年上方へ上ると府。京の愛宕山へ登ると
ぶうふ仏ともなーにざるくざいくと言ぶとるふ海の
ぶるのぢもなーぬの震弟を伽ごとゆメさふ傍ふ居る人ぶ
いるるぬれい京中で茶粥をとゝ法言ぶごるちゆるること

畳く寄るぢやと言こが。もれもめの射ん肝を浅くこつけ「まるこ
めぐぐれいふいの。爰な亭主のにとふとトットかうん。
佛の口器ぢや「それいきれとるさ。おまんがごんなふか身な
そうても江戸へ繁昌の地ぢ。江戸でなくては荷のそけう所が
沢山ふ毎年下んなるぢやア後へ。江戸ッ子の金をおまん
ぐぐむーつて来てりのぐ。きてこれば江戸の法国の為ふ大切る
は得意抜ごうら江戸の方へ足をむけて江戸の罰がある
ずと男なふ江戸へ下ふぐよ他の国へ廻をして金拾ふなんて

「えうの世人そりやア出来ぬ。江戸のおうげで金が出来(ぬ)のぐ
「なるほど是ぢう毎ちむらーいふ。さういふ所ぐ行
てを上方者関いぢや成ねどもちでもやへ下とこのが大い
有ぢうぢやけどトットは高ぢの四ぢ。ぐるもこん。やこりや誤ふこと
関ぢく師匠め誤ふてをるぞ。ミタがお江戸といふ所は此上もるい
繁昌の地で金設が目の前ふちく。ぢやふようて大通ふ
金が隠くて。早う拾へ早う設いと云ぬぐうぢやが。江戸ハ
其金と設くるが下まぢやい。先生一金が嫌と云えるこ

「それハ墓見暗しとやらで。めくまり傍よりこそこつのゝ
ぬくまくの人よ拾ひ利屋と「トラフッテ」そもいな
ゝでも云ハゆやうるまい。エヘヘちゝとさうもあるまいい「東西
只今の角力行司頼り置まを「こゝらふ「イヤ皆さんお世ゝ
きうぢざりはせうは兎ゝさりませ。爰ゝ贔屓ゝ私の新
さんこゝりや草ひぐぢざりまるハ。もはさんぐゝ人お負を
やとぢやうのゞ上でせれと私ぢやゞ一体ハ菊地のお人様ハ
義強うてトット人氣ゞ勇ゝいナそれゆゑ私どもを大好ぐ

ぐさりまるこゝや差うわんまのゝでざりまた「まと
和睦せうとそうて。上方者ハどうしても必生様人「イヤくこれ
だりハ実ぢや生憎わんまのゝもちや。トキニトまぐまゞとち
の方へ出てくるゝかと間ゞ入るゝ。ちよと往くゝうゝ世論へ
入れて垂てゝんセ「又ゝゝゝなりまゝぜ「ヤアだんゝのイヨッ
侍よ「又欲ぢりうゝ「欲ぢりゞ專ぢや月代剃るも金ゞ色ゝ
いトこゝびより二十八文ヨ。そりや二十八文ヨ。現銀といふ中ゝも
こちらのゝ爲浅ぢやさうい二割もうるや歩合ふ出てゝね。ケドモ。

銭相場が安うて的さんも〳〵合ずまいとやふさうぃ。こらう負て
やるぞや「ちまん」の天窓わようぃ。ぞ大あうぶぐうぐう三割まし〳〵成
かけ稼ぐきやア合ません「又ねうもうい駕籠のうえ江戸の苗字帽
をそうふれて髪結よ大あうぶぐうぐう出ーとう一向引合ハナ「ナン」
はいぞ江戸の駕籠ふ乗るとうさうあうあ道中かごゆも
乗れ稼ぐ者ごてア皆さんもなきい。作兵衛さんぐ毎年乃
道中ふ連なる人ぐ稼ぐとやあと。其ぐ者さ。やり上りと武家
様で上るとうふひとりのごあまんさんぐさう一すぐ江の島へ出

なとうとも安上りふーて五五と十あんもたうひるさうぃアス
百三十里の道中往来で二分弐朱さあそうぃ人もある
りんご子「コレく」好菓かる駕ふあもあるけどナ。いまくいるぐ
あるうい。三まん並ぐト乗てまるナ。ウソコデ番門のあうり
はぐぐキャッくと掛声ーうるぐナ。それうら跡とうぐうぐう唖の
駕籠ぐうれぐやマギウともうとうもうひとぐうで走るうい其
上ふ跡ぐうまるぐ駕めうナ。さんさと矢持るぐやヤ。いまく
ちうぐたまんうりんぐやあいうい。私もめんまうぐやさうい。

軽業の元も掛声をせんかいナといふて跡な奴めがナ。掛声して
能なりやおちでござる。つまらぬ左平次ぢやといふ様するやうさ
わい名ら秘もたまらんさうい。そんなら掛声せいでもだんない
がなぜかいふと跡な軽業ハ乗戯れるのぢやといふてござりや
三枚ぢやといふきろい秘も三枚ぢやといふて。あの人のハ三枚並
ぢや。ア三枚並ぐ掛声してかけられるやうなおまへ人出る
かいてえるされど。あふいドス声でさきなでつとふまうてしも
あるつと消て仕舞と「三弦ハ「作兵衛さんへ宿ろうヨ

〽とんだ所で能のさ子エ〽笛めが久しぶりで口上をまくさ。
アノ濡鼠めがそんな迄で居ないで〽お寺へ移ろうといふ事で
だんまりでかういふのござ子〽しく
それかなり短八といふ人さいぜんより
かゝるとこ見てひげをねのそあつくりしが
あどのあさうと短〽軽業でもあり出しかゝ先へひく鴬ヶ竜を紙
まぞならでならぬ
紙を附る〽苦い元は苦労と詞をかけて紙さ乗手の長六といふ人
手ぬぐひやかるゝおうけく
びんからゆるぎをとしてかつてるが
〽きうさめれの礼義とえええテ〽一串も
タシカさうぞうけの〽されが其がけの揺く徒〽ヤ軽業中宝
一度あつるいめに逢うてかららうらう行く時ちやあつるがナ。それや早く

ぎんてんせ南流ぢやといふてらッヨット走せと急だとる
ついッコデ五六丁も行くとそろふと俄ふ遅うなんてゆるくく
とかたをるさらい。コリヤ〳〵急ぎぢや其代ふ南流ぢやい
の早うあんせトいふてぷ又掛声してさろさとかけさらいぐ。
五丁ばかも行くてぷ又ゆるくくとかたをるッコデ私も言がせく
さらい。コレどうぢやい南流ぢやガナ。なんでもそいぞい急いで
ちれてふ南流ゆるもそけりや否ぢや南流ぢやくとらふ
さらふ又うけをるらい。そちらして土手へ〳〵とこうでッと

南流と一片半そこゆくと。篤分かきあぐきそろうとしてる屋
ゆきるとおりうんせ。ちのうハテ南流でようろぐのト行うと
さ所と答るんぢうたぐきくちらんらい。なんぢやとふのてら
ちの約束が南流三反ぢやとらふらい。イヤこちらの一片の
者ぢやといふてぷイヤく南流ゆるとふるをを度いふて
さうい。きぐ二本ぢやと言ひてきんて邪ぢも非ぢもうけ
をちふねよ仍く是非ゆうてけたてく百文ヤモちらい目ゆ
言〳〵出遇てく「アハ〳〵」言ふ作つもーぐちふきぐまぐ

あるるい。アナ初めて、ひとこと折よ。どこもかしこの家く娼妓買ふ
往こ。まづ、あるいたの。初や蒲ゞ海で住居く座く往こう。あるいう。
私ひとりはきき離されて、ぶらぶらまづ、ちれんぢやあるまいう。蒲団がこつそり行てめるあるい。ハテこれはめでも出上る
時こんを、ろて、寝るあるもちやとろうてナ。今そこゞ推が、あるい
ういッコデ上る蒲団を持上てト二枚の蒲団の上へそんと
這入く。蒲団ろく寝てあるとサア娼妓ゞまてこんと行ゞ
ゞ。ぬゞどれぢやのとぶるく

はきりいとはゞ下から往く仕舞ゞ。ハテめんよるゆちやゞナ
おりやはゞもあゞどれこそんあるものゞとおりのそあると。
ゞ毎ゞまてナ。先起いとうこそ紀くくナ。おまへさん寝
るのゞとうくゞ寝る上へ寝るのゞ。蒲団こちの
上へ寝さして呉ゞとうい。ハトゞうこそれゞ。ろくゞ
後の入こ錦の夜着ゞナ。蒲団の裾の方に有こうい。私
又ろうい推と寝くた。嬉ぬの夜着を積ゞのぢやとうこと
ういのくく今ておりゞくくこと豆ゞあるらくくこと甚ゞ疑さゞ

たもつ〳〵んのい「ハ〳〵〳〵」「ヤヤ」「宮う様〳〵」「老上角吹ぐ長
るのつこなる〳〵んハ高〳〵ぶ。イヤ皆さんこれハ「宮うちんと
お出なる世人「イヤ〳〵」「居と迎めんこのト」「長」「狂業の
口上とふ男ごの「短」「桃太郎の肩衣を羽織〳〵ちるめ〳〵と
吹うとい〳〵ぐ「手のかるいお方さ」「短」「長六くまめ人」「懐ハ
物を入居る「長」「新道の八百屋う〳〵猫を貰ってまと」「短」「小猫う
「長」「ム〳〵物とう名を号やうとい〳〵の駒ごの猫ごのとらぶも古い
う〳〵ぶなんそさとそ丸ハ強い名を立面とるがごうも行人「短」「無業な

とちけやる「長」「無業でもあるめよ」「短」「そんなら朝比奈ふ
金時。ウン三ハいつも抱んで関羽と呼ぶい〳〵」「長」「ねこ女猫ご
いる「短」「フム待よ巴ハ男のハどうご」「長」「ぼ〳〵いナ一ッ嬢んでさんなう
チョッ〳〵〳〵巴ハ前まいく〳〵。ハいハ悪いさんとう舌が
長ふ絵人物と「短」「巴と云うし」「長」「巴まいく〳〵巴〳〵。ナニ〳〵
どう云〳〵もうびゆ〳〵い「短」「そんなる〳〵板額さ「長」「板額まいく〳〵。
板額まく〳〵「短」「反魂香とゆえるの「長」「るいく〳〵」「短」「待ん〳〵よ
ドレあれが猫の号称ふなんてやらう。ヲト強いのとハテ何ご

らうナ。ヲロトめうくあうぞく虎と号さんく虎ゐど強いがゆゑ
強く（長）ムウ行強くよ虎いうゐど強いが龍虎相伴といふう
龍の方が上ぞぜ（短）ゐるゐどそれもさうう。先虎と龍と戦ふ
と龍が虎めうくゐるが自由ぞうふ虎が叶ふ人（長）そんなら
龍と せうう（短）龍が高い龍高い（長）小の川よ谷風といひさう
ぞの（短）どこいくうてうう（長）ちひ龍も雲がなくさうう
ゐどうう強くぜ（短）ゐるゐど雲あるうの強くの（長）雲とつけ
ようう（短）まうんく（長）雲も風あり吹ちうゐるのそん

ゐよ風う（短）さうさの甚風も障子とふりの風ゐと
めんゐでふ吹込ふるゐふ強く（長）風よりも障子が強いのチヨウ
いんそ障子と号ようう（短）待強くよ障子も強ぞうゐふ
嵐ら強る（長）さうさく嵐と号ようう（短）イヤく嵐も猫ゐを
かゐの強く（長）ムゐゐど嵐よりの猫ぞよい（短）そんなら
苦労をゐるゐの強く（長）なぜ（短）ゆんぞり猫と呼ぶいく
（長）おきやアがれ大きゐ苦労しらぜトいふ猫（長）ニヤアト
ゐく（長）ゐんぞニヤアぞ古風ゐ法ぞゆんまりおさぞまうぞ

ワンとでも泣くくられりゃァつくんで物所ぬ考えてお谷を記もお
短うさァ稀へいつものるの三ヤンと思ったらば長ウムこのつァいく二ヤン
と申う短三ヤンと申うでい五大力のあうぐ〻トいふ六十余の中長さん
おらが野郎を志ゝ稀へう長イ〻エ中みゝいあうぐ仮の形く這入
迎んでうゝあやァるう新も形も人を稀へ長今朝生さのう工
中ケさるゝ社名れど一件目の朝生さ仕ぐ今ぬ仮ゝ稀へ長又
イぐきんさま仮を仕めるとゝろ横町の意を中仮仮のとと
中も居稀へ悪い癖る野郎さいつまでも馬鹿ぐ止稀へふる

あれが目の黒の目い社が今ぬも目を稀へて人を人間い
閑ぐ長さうさぬあへの目が白くあてい後悔さ。あてまい
内ぬ不分をきけ目が社のさ短病目で目の赤い内いぐぐ
らう長馬鹿ァ云ある短好藁ぶあうはくるれば内い寄ぐ。
まんさりんぐの中ァさゝ稀へのいつが尻ねぐあぐうも
仮食ぐうれ稀へぜ長あへが尻をねぐうゝ悪いふる気は
うゝかきひつけわぐいう中どうもさうふすゝねゝ一体あいつと
面白て貸とあんが悪いる。アさまうゝあへぐさい

ゆうに商賣を精出して眷屬よりのハ甚だも始終がし
親くちも差入がいゝ者方の住合さおらぐ所の世郎がゆうゆ
世話をゆうせふ奴い親が苦労をそれ罪だらうでも立行ね
うくで稼人のさ。親い子が不愛いうゝ四討をあてはあ
るそれど天道さあがゆえてござあうぷ稼くゆい四討が南りまうと。
わんのゆさ。もあ人方も今のふまらいうがてんぐゆ用ゆる
せ人老人とふゆのい悪いるゆらい稼へゆのざゝどりや行ようせう
「短」伊所へ行ゆさる「中」地主さゆ人往くゝ者稼へきやゆうら稼へ

アイちハあくゝトうれる「中」市ゆうえもゆの島子でハ大変ゆ
苦労さるの「短」さうよ「長」ちゆんうこゆがぜ「中」えとりゆ子ゝ云
ゆのハ危角のまゆゆうらゆ役ゆ立稼へ「長」全体ゆも悪い
それご親がゆさゝいうゝ悪いのよ「短」小児の付うゝ云ゆうゆ安ゆ
言ゆるとユテあくなるゆんよ「長」付ハいゆるゆ所へくゝまゆて血道
をぶちのげて騒いでゆるゆ今ゆゆハ稼へよゆなゆ形ゝの金代
捨てちゆとぐゆりの株家智を他のまゆゆ渡ゝくゝ者ゆ
「短」わんゆよ。ゆくるゆこ他のまゆハも耳ゆハ這へくゝ稼へくゝゆ

「秋ごと言く学んでも右の耳うふ左りの耳へぬけうふ毋
なう居るうふはじちふ極へぬの子へ十八九のとしまうふを
評判のとと色者ぐうけぐんうの間よあんみ放蕩者よかぐう
「人も三十越してどうふになううのうふしうよ。其ふ言ぐ
まるうぐのうまうくうぐのうぐは皆極しいうふ変でたまうふ
極へうま「遊とうふりの面白ばしおして金とはうふ極ぐ
まうふねうにうけと物ぐうふ。手あへうふ子の間はけて
ようぬぐ勘弁ま極ぐまうふ極へ「短うかうとまるとおとし穴へ